

新自由主義的市場国家と 21 世紀の社会民主主義

進化経済学会「制度と統治」研究部会 2015. 3. 14 若森章孝（関西大学）

はじめに

第一次世界大戦と 1920 年代：自由主義（自由放任主義）の危機と「社会主義」への期待
→1930 年代：ケインズ主義、社会民主主義、（新自由主義）、共産主義、ファシズム →
第二次世界大戦後から 1970 年代：社会民主主義、ケインズ主義、社会主義→とくに 1989
年以降：新自由主義の興隆とオルタナティブの不在

・ 20 世紀の最も成功したイデオロギーである社会民主主義は、なぜそれが受け入れられた
戦後の経済成長と福祉国家の時代に思想的影響力を失い、1980 年代以降の新自由主義の隆
盛に対してオルタナティブになりえなかったのか

・ グローバル化のなかで社会民主主義の再生は可能か

・ 新自由主義の強さの源泉はどこにあるのか→国家の役割の再定義と自由論

政治領域の縮小→個人的自由（経済的自由）の拡大→自由な社会（市場の諸力によ
る個人間の関係の調整）

・ 争点としての国家論：政治による調整（民主主義）を市場による調整に置き換えるか、
政治によって市場経済の暴走を抑制し、市場経済、民主主義、社会の安定の調和を取り戻
すか（民主主義の論じ方：民主主義を政治領域に限定せず、市場経済や社会の安定と関連
させて議論する論じ方）

・ 争点としての政策思想：新自由主義か、社会民主主義か

・ 争点としてのグローバル化における国民国家と民主主義の運命・将来

・ 争点としての、新自由主義的市場国家による不安と恐怖の拡大のもとでの選択肢→専
制的全体主義的国家（個人的自由を犠牲とする秩序の回復）か、社会民主主義的国家（資
本主義の破壊的影響からの国民の保護）か

1 社会民主主義の起源と両大戦間における出現と戦後の普及

1) 社会民主主義のイデオロギーと原理

政治の優位、階級横断的協力：正統派マルクスの史的唯物論と階級闘争を否認

社会主義をマルクス主義から離れて定義(Berman1998;2006)

国家の権力を利用して市場経済を制御すると同時に、その破壊的影響から国民を保護

政治の優位と共同体主義を強調するが、民主主義と個人主義的価値を尊重

古典的自由主義とは異なる国家、市場、社会の関係の構築

資本主義、機能する民主主義、社会の安定の 3 つを初めて両立させることに成功した一
→

社会民主主義は 20 世紀の歴史で最も成功したイデオロギー

戦後のヨーロッパ諸国の経済的繁栄と社会的安定、社会民主主義的秩序

真の社会民主主義者の系譜：ベルンシュタイン、ド・マン、カルロ・ロッセリ、
アルビン・ハンソン

2) 社会民主主義の起源

・19世紀末の民主的修正主義の背景：通信と輸送における新しい技術による刺激→資本主義の新たな躍進→地球全体にその影響力を拡大・急速なグローバル化→マルクス主義の正統派的理解、史的唯物論と階級闘争（歴史は人間の意識的行動によってではなく、経済発展によって前進する。社会主義者は経済発展が内的矛盾を発展させ新しい秩序の出現を用意するまで待たねばならない、階級闘争とプロレタリアートは産婆としての役割を演じる。）を揺さぶる。

・20世紀初頭のジレンマ：資本主義は繁栄する一方で、経済的不正義と社会の格差は残っている。受動的な経済決定論（矛盾がシステムを崩壊させるのを待つ受動主義）では経済的社会的なストレスのもとにある多数の人々の要求に応えられない。また、20世紀初頭のグローバル化の波と急速な混乱した変化→ヨーロッパ社会の不安定と自己利益の賛美や個人主義の蔓延や伝統的価値・共同体の崩壊、社会の原子化・分裂に対する右派からの批判：正統派マルクス主義は増大する労働者の不満や民族主義的感情に無理解。→民主的修正主義の出現、ベルンシュタイン『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』（1899）

・19世紀末のベルンシュタイン他の民主的修正主義者による正統派マルクス主義の主要な命題——史的唯物論と階級闘争——の批判と、新しい原理として政治の優位と階級横断的協力を提案（Berman2006:200）。

・ベルンシュタインたちはマルクス主義の修正または現代化を主張、しかし、彼らの批判者はマルクス主義を全く別のなにもものかによって置き換えると動きと見ていた。

3) なぜ両大戦間に社会民主主義が出現したのか

①第一次世界大戦後の大きな変化

・ヨーロッパ各国での民主主義の波→社会主義政党が占めた中心的な立場、社会主義者が政権に参加する前例のない機会→政治権力は社会主義的転換のためにどのように役立つか、という避けられない課題

・戦争→ナショナリズムの大きな力を動員、共同体、連帯、闘争に価値をおく世代を育てる→大衆的な右派運動がナショナリズムの傾向に乗じて発展、階級闘争重視の正統派では普通の市民のニーズに応えられない

→修正主義を社会民主主義に転換→左派の多くの人による公然たる階級闘争と史的唯物論の拒絶→階級を超える協力と政治の優位を承認

②大不況とその結果

史的唯物論と階級闘争の命題を最終的に破滅させた。経済諸力は制御することはできない、労働者階級以外の集団の恐れや要求は社会主義者には関係がない、という正統派の主張は政治的には自殺行為であることが、明らかになった。

・19世紀末以来の自由主義と資本主義への抗議の高まり、戦争と大不況による大衆的な資

本主義批判のうねり→市場を飼い馴らすことを約束する政治運動を歓迎する多数の民衆。経済諸力を歴史の原動力として強調する正統派の敗北)

・両大戦間における社会民主主義の形成 (まとめ)

社会主義政党の各国での失敗→ますます多くの社会主義者は運動のためにまったく新しいビジョンの必要性を認識→一世代前の修正主義者の命題、政治の優位と階級横断的協力の価値を再認識。両大戦間と大不況の文脈では、この認識は政治的力を経済的諸力の管理

のために利用することを意味する。正統派マルクス主義と古典的自由主義者が経済的破局に直面して静観主義、待機主義 *passivity* を説くのにたいし、新しい真の社会民主主義的左派は国家の権力を資本主義システムの制御・飼い馴らしのために利用する綱領を掲げて闘った。自由放任主義とソ連の共産主義の間の第3の道、市場の破壊的諸力を抑制する一方で、その富を生産する能力を利用する道。ベルギー、オランダ、フランスのド・マン、ス

ウェーデンのSAP。各国の違いがあるが、両大戦間の社会民主主義者の共通理解=正統派マ

ルクス主義の受動性と経済決定論を拒絶、資本主義を制御するために国家の権力を利用することが必要であるという信念。→過半数の支持を得るには右派のナショナリズムを抑える必要→ベルンシュタインが30年前に主張した階級横断的協力のテーマに復帰。崩壊と不安の時代のなかで、国民、共同体、共通善は階級闘争史観や古典的自由主義者の個人主義よりも魅力的。社会民主主義者を労働者の党から国民の党に移行させた。

4) スウェーデンにおいてだけ社会民主主義の原理が確立

社会民主主義のドイツの失敗とスウェーデンの成功。スウェーデンにおける社会民主主義の生誕 (における社会民主主義への移行)、SAPは他の国では急進右派が利用していた国民 *people* や民族 *nation* のような概念を取り込んで、1930年代初頭の混乱期に社会的連帯や国民的統一の呼びかけを主張することができた。(Tilton1990)

・カール・ヤルマル・ブランディング (Hjalmar Branting1860-1925)

普通選挙による最初の首相、ベルンシュタインの修正主義を受け入れる。

社会民主主義の政治理論の定礎：民主的政治と漸次的改良による社会主義的目標の達成

・エルンスト・ウィッグフォス(Ernst Wigforss1881-1977) 1932~1949 大蔵大臣

スウェーデン社会民主主義のイデオロギー的基礎を構築した中心的思想家、経済的必然性が階級なき社会主義社会をもたらすという観念を拒絶→社会主義社会が実現すべき諸価値を明らかにする必要性→社会主義の本質的要素、平等、自由、民主主義、保障、より効率的な生産のための経済の意識的統制、連帯→社会民主党の目的となる概念
社会民主主義的価値のなかで、平等が中心的位置を占める。平等のために努力するとは、すべての人が価値のある人生を送ることができ、自由と権威、富、保障、友愛、個人的発展の機会を分かち合うことを可能にするために取り組みことである(Tilton1990:51)。こ

のような平等の社会的表現は階級なき社会である。それは、トーニーと同じように、国民の間の伝統的感情的な壁を取り除きことである。

目的を達成するための改良主義的手段、社会福祉政策、累進課税、経済計画、産業民主制、産業の社会化

大恐慌期に「ケインズ以前のケインズ政策』を実行。1932 選挙のパンフレット「われわれは職を提供できる」で、私的投資の不足を解消する公的支出の増加、乗数効果、救済政策によって、雇用を創出し、国民を経済的従属から自由にし、彼らを彼らがつくった経済の主人にする、と訴えた。

・アルビン・ハンソン(Albin Hansson 1885-1946)1932 の選挙で多数派を形成し首相

「国民の家」としての社会主義：民主主義と友愛に基づく良き社会、特権を持たない人びとが社会を作り変えるために協力する必要性、不平等と民主主義の制限、思いやりの欠如としての資本主義を批判、大恐慌がスウェーデンを襲ったとき、SAP はすでに国民の家の思想で備えができていて、労働者のみならず、弱いもの、抑圧されたもの、より広く国民を助けるという戦略を提唱した。1932 の党大会で論争の末、新しい経済政策を採択。党の 1932 年の選挙マニフェストはウィッグフォスの経済戦略とハンソンの「国民の党」戦略を統合し、41.7%の支持を獲得した。次の 1936 年の選挙では「われわれは危機を克服した」というスローガンで勝利。

「家の土台は共同体と一体感 *togetherness* である。良き家は特権的な構成員も無視された構成員も、えこひいきや兄弟の差別を認めない。良き家には、平等、配慮、協力、助け合いがある。これを大きな国民と市民の家に応用するならば、それは市民の特権的な人びとと無視された人びとに、支配者と従属者にと、富者と貧者にと、豊かな人と貧しい人にと、横領するものと横領されるものとに今日分離する社会的、経済的なすべての障壁を取り除くことを意味する。スウェーデン社会はまだ国民の家になっていない。形式的な平等と

・ニル・カーレバイ (Nil Karleby 1892-1926) 『現実に直面する社会主義』(1926)

民主的社会主義は生まれや所有に基づく都県を排除することによって、自由をすべての人に拡大する。社会主義の目的は、自由主義的見方を廃止することではなく、労働者階級を社会生活における完全な参加へと高めることによって、それを完成させることである。ブルジョワ的所有関係を「権利の束」として理解：この所有認識→資本家の特権を玉ねぎの皮と同じように最後には何もなくなるまで徐々にはがしていく戦略に対する理論的根拠を与えた。もし所有権が多く個別的権利の集合体であるならば、これらの権利を相互に分離することができ、それらを次第に社会の影響力に従わせることができる。すべての社会政策(8時間労働制度、工場立法、強制的労災保険など)は所有権の変更と修正である。社会的経済的資源に対する資本家の視界を制限するすべての改革は社会主義社会にむけての一步となる。改革は社会の変革の単なる準備ではなく、社会の変革そのものである。SAP の指導者と労働運動に理論的基礎を与える。長期的な目標と漸次的改

革との関連について理論的基礎を与える。

5) 社会民主主義とファシズム、ナチズム・国家社会主義との違い

自由主義と正統派マルクス主義と断絶して、経済に対する政治の優位と個人または階級闘争に対する共同体的価値に賛成する議論をした点で、社会民主主義とファシズム、国家社会主義は基盤を共有する。政治の優位と共同体主義の信念を共有。

政治の優位とは：社会民主主義にとって：民主的国家を、資本主義の有害な影響から社会を保護し、もっとも弱い人びとの福祉と安全を促進する政策の制度化のために利用する。
ファシスト、国家社会主義にとって：国家の支配を確保するために、専制国家を利用して市場を管理する

共同体主義とは：社会民主主義は社会的連帯と社会的統一を強める政策を強調。ファシストは国民と国民的利害を促進するための政策を強調する

・社会民主主義とファシスト、国家社会主義とのいちばん重要な境界線

社会民主主義は民主主義と、自由主義のいくつかの側面を重視する。民主主義を目的であるとともに手段として考え、その他の目標を民主主義の維持・達成の下位においた。ファシストは民主主義を拒絶する。

6) 第二次大戦後の社会民主主義

戦後秩序は明らかに社会民主主義の勝利を示していた。西ヨーロッパは経済成長とよく機能する民主主義と社会的安定を結びつけることができる最初の時代を画した。

<国家、市場、社会の新しい関係>

・社会民主主義の原理と政策：ヨーロッパ大陸で広く受け入れられた。

戦後秩序：国家、市場、社会のあいだに存在する関係の大きな修正

「埋め込まれた自由主義」という表現は誤り、社会民主主義的秩序と言うべきだ

・制御されない資本主義—>大不況—>1930年代の政治的混沌・混乱と社会の混乱

同じ道を繰り返すのは賢明ではない、という政治的合意。統制されない資本主義は、市場、政治、社会という3つの領域の目標を脅かすという広範な合意があった。1945年以降、ヨーロッパの諸国民は経済成長を保障する一方で、同時に社会を資本主義の有害な影響から保護する新しい秩序を構築するために出発した。

・欧州諸国は、新しい秩序、経済成長を保障すると同時に、社会を資本主義の破壊的影響から保護することができる秩序を目指して努力した。資本主義は、それ自身の創意に任せれば、良き社会を生み出すであろうという信念の失墜。この認識はドイツのキリスト教民主同盟やフランスのカトリック共和主義運動にも広がる。

・1945以後、国家は経済よりも社会の保護者として理解され、経済的要請は社会的要請に優先順位を譲った。西ヨーロッパの諸国は、経済を管理し（市場システムは政治権力によって調整され制限される）、社会をそのもっとも破壊的影響から保護することに専念

・ケインズ主義と福祉国家—>戦後における国家、市場、社会の関係の変化を促進

<不完全な社会民主主義の勝利>：古いイデオロギーにこだわり、政治の優位と階級横断

的協力という原理は理解されなかった。

- ・戦後秩序は社会民主主義的原理と政策の勝利を表現していたにもかかわらず、実際の社会民主主義者にとってそれほどの勝利ではなかった。左派の多くは戦前からイデオロギー的アプローチに固執していた。また多くの非左派的な党派がすばやく社会民主主義的綱領の中心的項目を取り入れた。
- ・戦後の社会民主主義の政党はケインズ主義や福祉国家のような政策の擁護者になったが、この実際の新しい方向性は必ずしもそれに見合ったイデオロギー的な新方向によって裏づけられていなかった。主流の社会主義者は、資本主義を乗り越えるといった、階級的な、戦前のイデオロギー的目標を宣言し続けた。
- ・民主的修正主義と戦後秩序との生き生きとした有機的連関の喪失は、部分的には、左派の世代交代の結果である。テクノクラートや管理者タイプの指導者の出現、前例のない政治的成功と権力を統治、しかし、創造性や理論的構築に欠ける、その結果、20世紀の最後の数十年までに、民衆的左派は社会民主主義の理論的根拠や目標から遠ざかり、彼らの先行者が指示してきた特定の政策措置を堅持するだけになった。

<ドイツの社会民主党の場合>

- ・広範な反資本主義的感情とナチに対する社会民主党の抵抗、指導者の英雄的物語を利用できなかった。シューマッヒャーは、エアフルト綱領（1891）とおなじような、資本主義の廃止、生産手段の私的所有の社会的所有への転化、労働者中心主義、他の党への不信を主張した（1945 演説）

- ・バード・ゴードスベルク綱領（1959）：現代的社会民主主義の2つの柱、国民の党戦略と資本主義の改革戦略を採用、国有化を社会主義経済の中心原理と考えないことを宣言。「可能なかぎりの競争、必要なかぎりの計画を」、要するに社会主義をマルクス主義から切り離すことを通して、社会民主主義の勝利を確認した。しかし、ゴードスベルク綱領は政治的孤立から脱却したいというプラグマティックの動機から生まれたもので、将来のための企画やイデオロギー的原理の検討を欠いていた。この綱領によって、SPD は中道左派の位置を占める。

- ・1970年代には（ブランド政権、シュミット政権、SPDの戦後の変化の頂点だが、到達すべき社会の目標や原理を欠く）ドイツ国民経済の最も油納な管理者を自認、70年代末までにはシステムに統合され、イデオロギー的に枯渇した。老人と公務員の党となる。選挙に弱く内部に不満を抱える党。経済不況とともに政権をキリスト教民主同盟に渡す（1982から1998）まで。

- ・ベルリン綱領（1989年）：目標としてのエコロジー的社会的に責任のある社会を明記
積極的な戦略の提起を欠く

- ・1998年のシュレーダー政権：第三の道による労働市場・社会保障の改革

<スウェーデンのSAPの戦後の取り組み：国家 市場、社会の間の変化>

成功の要因：社会民主主義の原理とイデオロギーのコアの要素を深く理解し、それらを実

行に移す創造的政策の発展に努めてきた。政治的には、国民の党戦略、強い社会をつくる戦略としての福祉国家の拡大の計画についての議論、現代資本主義に固有な不確実と不安から国民を保護する福祉国家。社会政策＝個人が独力では解決するには大きすぎる問題への保障。現代社会の問題はますます大きな協力と協働を必要とするという認識。国家の介入による経済の管理、個人の市場における地位と彼らのライフチャンスとの連関を切り離す。福祉国家はそれ自体価値があるとともに、よりよい将来への一歩である。それ自体が一つの社会主義の形態である。スウェーデンの福祉国家は社会の転換の作業を行っている。福祉国家は「良き社会を創る手段」(ウィグフォス)である。

・戦後国家の役割：成長の促進と社会の保護という2つの課題を担う。

多様な政策手段：投資基金の計画化、財政政策、労働市場のパートナーの協力、国有化を用いない)

・戦後のスウェーデンの政治経済の最も特徴的な手段：レーン＝メイドナー・モデルと福祉国家＝普遍主義、脱商品化と社会的連帯、分配と国民のライフチャンスの決定要因としての市場の影響を抑制する。

7) 総括＜戦後の社会民主主義の弱点と後退の要因＞

1) 20世紀における社会民主主義の原理とイデオロギーがどのように成立し、なぜ20世紀でいちばん成功したイデオロギーになった、についての認識の欠落→その歴史と原理の忘却

2) 1920年代と30年代に成功した戦略の1960年代、70年代における枯渇と対応の遅れ
ライフスタイルと家族形態の多様化→戦略の陳腐化
多文化主義と移民問題→国境を越えられるか

3) 政府の介入の批判と市場競争による調整を主張する新自由主義を30年にわたって放置し、国家の役割を再考する議論と対抗戦略を打ち出せなかった。→国家再考の欠如

4) 1990年代末のブレア、シュレーダー、クリントンの「第三の道」、アンソニー・ギデンズ(1998/1999)『第三の道——刷新された社会民主主義』は社会民主主義の原理(民主主義と国家による市場経済の有害な影響の抑制)ではない。経済効率とフレキシビリティを優先するものである。

5) 新自由主義の自由論の説得力、政治的領域(強制)の縮小による個人的自由の拡大という論法に対抗する自由論の欠如

2 新自由主義的市場国家

1) シカゴ学派の国家論の輪郭

・国家による競争的市場秩序の構築

「市場は自然にそれ自身の継続的な繁栄のための諸条件を生み出さないであろう。したがって、新自由主義はなによりも、市場とそのもっとも重要な参加者である現代企業の成功を保証するために国家をいかに再起動させるかについての理論である。」(R.V.Horn and

P.Mirowski2009 : 161)

「新自由主義は、個人の根本的重要性に関する 19 世紀的自由主義の強調点を受け入れるが、この目的を達成する手段としての自由放任という 19 世紀的目標を、競争秩序という目標と取り換えねばならない。・・・国家はシステムを管理し、競争に有利な諸条件を構築し、独占を防ぎ、安定した通貨枠組みを整え、過酷な遺産や困窮を救済するであろう」(Friedman(1951)Neoliberalism and its prospects,Farmand,Feb.,17.)(Mirowski and Plehwe2009:217)

・政治における合意を市場による合意に置き換える

ミルトン・フリードマン(1912-2006)：競争的市場を信奉するシカゴ学派の旗手

『資本主義と自由』(1962、日経BP社、2008年)

市場を通じた調整：個人が自発的に交換し助け合うやり方、強制しなくても調整が可能

競争的資本主義：広範な相互依存と個人の自由を調和させる仕組み

市場を通じた合意による政治の場での合意の代替→自由な社会における合意の理想 (68)

「市場の役割は強制によらずに合意を導く役割を果たすことである。いわば市場は、実質的な比例代表制として機能する。・・・政治の関与は避けがたいが、政治の場での意見調整は、社会の安定を成り立たせている市民の関心にひびを入れるやすい。・・・市場が広く活用されるようになれば、そこで行われる活動に関して無理に合意を強いる必要がなくなるので、社会の絆がほころびるおそれは減る。市場で行われる活動の範囲が広がるほど、政治の場で決定し合意に達を形成しなければならない問題は減る。そしてそういう問題が減れば減るほど、自由な社会を維持しつつ合意に達する可能性は高まっていく」(66-68)。

・自由社会における政府の役割：市場を通じた個人の行動に委ねることができない事項(ゲームのルール決定と審判)

法と秩序を維持し個人を他者の強制から保護する

自発的に結ばれた契約の履行を保障

財産権の定義とその行使の保障

通貨制度の枠組みを用意

・スティグラの転向：私的独占の規制・解体論者から規制の撤廃論者へ

シカゴ大学で産業組織論ワークショップを開始(1950年代後半)

集中度の高い市場でも、あたかも競争的であるかのように作動している

George J.Stigler(1975)The Citizen and The State,The University of Chicago Press.(ジョージ・スティグラ(1981)『小さな政府の経済学』余語・宇佐美訳、東洋経済新報社)

・国家と市場の区別の解消：シカゴ学派は、大部分の政治はあたかも市場プロセスであるかのように理解することができ、それゆえ、新古典派理論によって公式化することができる。政治家は投票者と同じように、それ自身の効用最大化を求める。ただし、国家は市場がよりよくより効率的に提供できるだろう結果を達成するための劣った手段である(p.162)。

2) ブキャナンの国家論の骨子

・ブキャナン：少なくとも、ウェーバー的な官僚制の概念に固有な公的利害と比較すると、「公共選択は政府の失敗の理論である」(Buchanan,J(1979),What Should Economists Do? Liberty Press,p.178)

・国家とは何か、国家をどのように捉えるべきか

国家を新古典派理論の中心問題として確認した。それまでは、スティグラーによる国家的行為者の理論は規制政策（規制者が規制する産業のとりこになってしまう理論）に限定されていた。すべての政策は投票者および政治家の経済的利害によって説明される。政治的市場における不効率な結果は政治的意思決定（多数決）の欠陥として非難される。「われわれは公共選択を政府の失敗として総括することができる」（1979）。

・「国家の個人主義的概念」（集団の純粹に個人主義的概念）

有機体概念の否定：有機的国家、一般意思を拒絶、公的利害を否定

一般意思は、個々の人間の政治選択が支配する意思決定プロセスとは独立に導出

社会選択に加わる個々の参加者のそれぞれの利益とは別個に、公的利害は存在しない

支配階級による被支配階級の支配の手段、という階級国家論も拒絶

社会的厚生関数を採用しない

・いかなる条件のもとで集団内の特定個人が、ある立憲上の変化を改善または悪化と判断する規準：概念上の全員一致ルールを採用（国家の個人主義的概念自体のなかに暗黙にあるもの）。社会集団の各成員に便益をもたらす提案、全員一致ルールによって個人間比較を行うことを避けることができる。個人主義（個人）から出発する共同選択と共同意思決定プロセス、政治的選択決定ルール。

・ブキャナン「人間と国家」（1986）：国家なしの社会を主張するアナルコ資本主義（ノジック（1974）『アナーキー・国家・ユートピア』のMPS内への影響を憂慮して、新自由主義的国家の理解を説明

「人間は国家に対して奴隷であるが、そうあり続けねばならない。決定的に重要なことは10%の奴隷制は50%の奴隷制と違っていることを認識することである」（J.M.Buchanan, Man and state, in S.Pejovich(ed.)Socialism,Kluwer Academic Publishers,1987)

3) ブキャナンの国家論の展開

ホッブスの闘争状態→立憲契約による守護国家→立憲後の契約による生産国家

自然分配（当事者間契約）→契約の強制・監視→私的取引の拡大、公共財生産の必要

武装解除の同意 公共財の供給と費用の配分に関する

全員が相互に利益 集合的選択＝複雑な交換過程

権利構造の確定 公共財取引の契約

・2つの社会契約と2つの国家を区別することの方法的重要性

守護国家 protective state の役割：立憲契約で規定された個人の権利を強制、契約する自由な人びとの間の財産権、財産の交換の権利の強制

生産国家 **productive state** : 公共財取引の契約、国家は審判者からプレイヤーになる。

市民の同意なしに権利構造を修正する脅威、国家を制御するルールをいかにつくるか

- ・ 脅威を与えるリバイアサン（奴隷） <————> 自由な人間間の秩序あるアナーキー
奴隷（自分の独立を放棄）と自由の間のどこに境界線を引くのか

3 グローバル化と 21 世紀の社会民主主義

1) 再生の条件と拠り所

- ・ 国際資本移動の増加と国際競争の激化—> 国家による企業活動の規制と寛大な福祉国家の後退、移民問題とヨーロッパ社会の変化—> 共通目標の感覚と普遍主義的福祉政策を掘り崩す、といった問題は、社会民主主義がその唯一の解決策である、近代性の基本問題、すなわち、資本主義、民主主義、社会的安定（社会的連帯）のあいだの緊張関係にどれもかかわっていない。社会民主主義再生のもっとも大きな障害は構造的な要因ではなく、左派の知的欠陥と意志の不足である。
- ・ 社会民主主義の再生の前提としての固有の基礎原理の再発見
適切な管理がなければ暴走する市場はさまざまな社会的政治的害悪をもたらすが、適切な監視があれば市場は大きなプラスを生み出すという政策思想。西ヨーロッパのもっと

も成功した時期（1945年以後の社会秩序）の核心にあるもの。その大部分は最近の二三十年のあいだに忘れられてしまった。今日のグローバル化論争の参加者は思い出さねばならない、戦後の秩序のもとでのみ、ヨーロッパは無数の豊かさを生み出す資本主義を機能する民主主義と社会の安定に結びつけることができたことを。20世紀の前半には、こういった両立は不可能であった。社会民主主義者だけが、資本主義、民主主義、社会の安定の両立のための原理と戦略を提起した。20世紀の皮肉は、社会民主主義的妥協の成功そのものがその歴史的達成をわれわれに忘れさせたことである。

- 国家が人間の営みのなかで重要な意味を持ち続け、また、グローバル化の中で国民を資本主義の破壊的影響から保護する機能を維持するかぎり、「社会民主主義の遺産には存在価値がある」（ジャット 2010）。市民から見て正当性を保持する唯一の民主主義の国家。「一世紀間の労苦のたまものを破棄してしまうことは、わたしたちの前に来た人びとのみならず、これから来る世代への裏切りです。理想の将来の表象でも理想の過去の表象でもない。しかしながら、今日わたしたちの手元にある選択肢としては、他の何にもまして優れているのです」（ジャット（2010））
- もし社会民主主義が政治の優位を強調しなければならないとすれば、共同体主義の価値を再発見しなければならない。共同体主義は民主主義と同じように、手段あるとともに目的である。資本主義によって作りだされた原子化、不一致、分断に対する対抗であるとともに、社会民主主義の他の中心的要素を促進する要因である。
- グローバル化のなかで生き残る北欧の社会民主主義モデル
グローバル化→社会民主主義政策の時代遅れという通説に反して、北欧の社会民主主義諸国は生き残っている、貧困率、格差、労組加盟率、高い教育力、ジェンダー平等
周辺部の社会民主主義の展開：チリー、コスタリカ、モーリシャス、インドのケララ州
- 自由主義者は市場に無批判的、左派は市場にいかなる良さも認めない。両者は、資本主義の社会的影響を恐れる圧倒的多数の人びとに何も提供していない。
- ブレア、ギデンズの「第三の道」からの脱却の必要性
社会民主主義のコアの原理が政治の優位と、獲得した政治権力を民主的に用いて経済諸力を集団主義的善のために奉仕させることにあることを、理解していない。効率を第一にして、社会民主主義の共同体的側面を維持しているが、市場の諸力をより根本的な社会的目標を達成するように方向づける必要性を拒絶している。市場の原理に挑戦することを避ける。しかし、効率は社会民主主義にとってただ一つの重要な基準ではない。第三の道は社会民主主義の系譜ではない。
- 人間の顔をした資本主義、やさしい資本主義という左派の議論は誤り。戦後秩序の根本にある起動力と原理を誤解している。社会民主主義の目標はやさしい資本主義をつくることではなく、「市場の社会的政治的生活への衝撃をできるかぎり制限すること、抑制すること」（脱商品化）である。これは多く点で革命的な目標であった。それは資本主義制度に固有な深い傾向（市場の範囲と射程の拡大）に逆らうものである。

2) グローバル化と社会民主主義の課題

- 21 世紀の社会民主主義：ネオリベのグローバル化も左派のグローバフォビアも拒絶。進歩的なグローバル化を主張。拡大する市場の生産的潜在力を利用するとともに、それが万人の利益になるように管理する必要性
- 現代のグローバル化、資本の国際移動、国際競争、移民問題という文脈で、いかに資本主義、民主主義、社会の安定の関係を社会民主主義的秩序として成立させるか。
- グローバル経済のもとで北欧の社会民主主義の国は生き残っており、「スウェーデン・モデルは有効か」とう問いは依然として重要な研究テーマであり続けている。また、途上国への社会民主主義戦略の適応の実験も見られる。社会民主主義の道の余地を広げるグローバル経済のルールが行われるならば、21 世紀の社会民主主義は発展する可能性をもつ。
- 資本主義を管理する道具である国民国家が自立性とパワーのいくつかを失ったのに応じて、社会民主主義は国際的領域に関心に移す必要がある。これは言うはやさしく行うは難しいことである。なぜなら、国民国家に匹敵する国際的な政治的権威は存在しないからである。しかし、国際的組織を利用することができる。EU による資本主義の監視と管理（ハーバーマス）、IMF,WTO,世界銀行をグローバル資本主義の管理に利用。そのためには、これらの制度、機関の民主化が必要である。これらの機関の People に対する説明責任を求めることがてがかりになる。
- 多様化するヨーロッパのなかで、人種や宗教の共有に基づいて社会的連帯を主張することは実行不可能である。社会民主主義の刷新された共同体主義的アピールは、価値と責任の共有というより包括的な根拠 grounds にもとづいて構築されねばならない。21 世紀の市民権はいくつかの規則と規範の受け入れ基礎を置かねばならない。人種による接着剤から価値による接着剤へ。北欧の社会民主主義は多文化主義をめぐる問題への対応、移民問題の緊張への対応で後れを取った。社民に正当性を与えた「国民の家」が非スウェーデン人を統合することを困難にしている

3) 社会民主主義的道を支えるグローバル改革

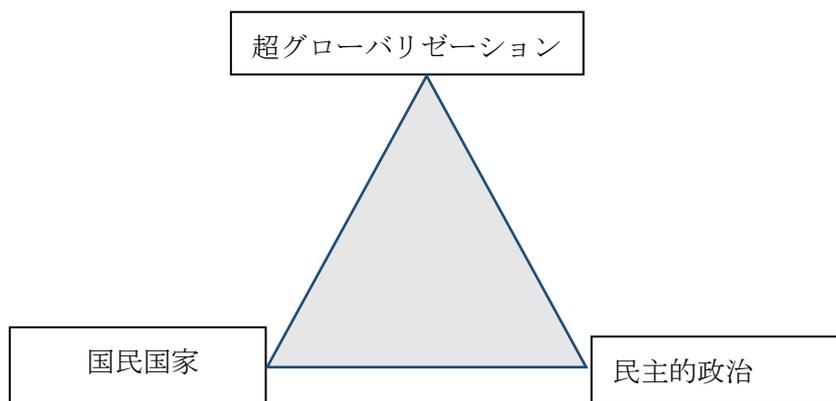


図 世界経済の政治的トリレンマと社会民主主義

出所：ロドリック『グローバリゼーション・パラドクス』柴山・大川訳、白水社、234 ページに加筆

超グローバル化、民主主義、国家主権（国民の自己決定）の3つを同時に満たせない。

- ① 国民国家と超グローバル化を選択→民主主義の犠牲、規制緩和、民営化、柔軟な労働市場、国際的投資家を惹きつける国家
- ② グローバル化と民主主義を選択→国民国家を犠牲、国民国家を超えた民主的なグローバルガバナンスにむかう
- ③ 国民国家と民主主義の結合を選択→グローバル化を制限して、国内の民主的正当性の確立。国際資本移動の制限と固定相場制という戦後のブレトンウッズ体制のアップデート⇒21世紀の社会民主主義の可能性の拡大
 - ・ トービン税、金融取引税、ギリシャ危機と緊縮政策
 - ・ ローバルな融資メカニズムの民主化国際資本移動の制限：ブレトンウッズ体制のアップデート

参考文献

- Berman, Sheri (1998) *The Social Democratic Moment*, Harvard University Press.
- Berman, Sheri (2006) *The Primacy of Politics Social Democracy and the Making of Europe's Twentieth Century*, Cambridge University Press.
- Berman, Sheri (2011) *Social democracy's past and potential future*, in L. Mook et al. eds. *What's left of the left*, Duke University Press.
- Block, F. and M. R. Somers (2014) *The Power of Market Fundamentalism*, Harvard University Press.
- Block, Fred (2011) *Reinventing social democracy for 21st century*, *Journal of Australian Political Economy*, No. 67.
- Buchanan, J. M. (1986) *Man and state*, in S. Pejovich (ed.) *Socialism*, Kluwer Academic Publishers, 1987
- Fischer, K. (2009) *The influence of neoliberals in Chile before, during, and after Pinochet*, in Mirowski, P. and D. Plehwe, eds. (2009).
- Horn, R. V. (2009) *Reinventing monopoly and the role of corporations*, in Mirowski, P. and D. Plehwe, eds. (2009).
- Horn, R. V. and P. Mirowski (2009) *The rise of the Chicago School of economics and the*

- neoliberalism,in Mirowski, P. and D.Plehwe,eds.(2009).
- Mirowski, P. (2009)Postface. defining neoliberalismin Mirowski, P. and D.Plehwe,eds.(2009).
- Mirowski, P. and D.Plehwe,eds.(2009)The Road From Mont Pelerin,Harvard University Press.
- Pontusson,Jonas(2011)once again a model:Nordic social model in a globalized world,in Mook, L. et al.eds.What's left of the left,Duke University Press.
- Tilton,Tim(1990)The Political Theory of Swedish Social Democracy,Oxford University Press.
- Wright,Erik(2010)Envisioning Real Utopias,Verso.
- Jacobs,Michael et al.(2003)Progressive Globalisation,Fabian Society.
- Rosselli, Carlo (1994)Liberal Socialism,Princeton University Press.
- グンナー・アドラー・カールソン (1967/1974)『機能的社会主義』丸尾直美・永山泰彦訳、ダイヤモンド社
- アンソニー・ギデンズ (1998/1999)『第三の道——刷新された社会民主主義』佐和隆光訳、日本経済新聞社
- 小林好宏 (1982) 経済学における政府の位置づけ、北大『経済学研究』32(1)
- 阪本靖郎 (1983) J.M.ブキャナンの国家論、真実一男他編『国家と市場機構』ミネルヴァ書房
- トニー・ジャット (2010)『荒廃する世界のなかで これからの「社会民主主義」を語ろう』森本醇訳、みすず書房。Judt,Tony(2010)Ill Fares the Land,Penguin Press.
- 関谷登 (2010) 公共選択から立憲的政治学へ、『東北学院大学経済学論集』第179号
- 谷口洋志(1987)契約主義、立憲主義および自由主義、『公共選択の研究』第9号
- ブキャナン／タロック (1962/1979)『公共選択の理論[同意の計算]』宇田川監訳、東洋経済新報社 (J.M.Buchanan and G.Tullock(1962)The Calculus of Consent, University of Michigan Press.)
- ブキャナン (1975/1977)『自由の限界』加藤寛監訳、秀潤社 (Buchanan,J.M.(1975)The Limits of Liberty,University of Chicago Press)
- ブキャナン／ワグナー (1977/2014)『赤字の民主主義』大野一訳、日経BP社
- 保住敏彦 (1992)『社会民主主義の源流』世界書院
- レグランド塚口淑子編 (2012)『「スウェーデン・モデル」は有効か』ノルディック出版
- 八木紀一郎「社会民主主義と市場経済——戦後日本の場合——」
- 若森章孝 (2014)『新自由主義・国家・フレキシキュリティの最前線』晃洋書房、第5章